別紙様式第2号

学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏　　名	丹羽　梓
学　位　の　種　類	博士（学術）
学　位　記　番　号	都市博甲第2485号
学位授与年月日	2024年3月25日
学位授与の根拠	学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第4条第1項及び横浜国立大学学位規則第5条第1項
学府・専攻名	都市イノベーション学府 都市イノベーション専攻
学　位　論　文　題　目	公立ホールと芸術ジャンル−沖縄に向けられた本土からのまなざしを通じて−
論　文　審　査　委　員	主査　横浜国立大学　教授　小宮正安
	横浜国立大学　教授　藤掛洋子
	横浜国立大学　教授　朴祥美
	横浜国立大学　准教授　辻大和
	首都大学　名誉教授　江原由美子

論文及び審査結果の要旨

本論では、日本における公立ホールと芸術ジャンルとの関係が、「沖縄に向けられた本土からのまなざし」という切り口を通じて明らかにされている。

第1章では、研究対象と研究目的、援用する理論、用語（「権力」「権威」「まなざし」「オリエンタリズム」等）の定義が述べられている。

第2章では公立ホールについての立ち位置についての検討、第3章では、日本に多く作られている多目的ホールが権威と権力の鬩ぎ合の上に形成されたことの指摘がなさされている。

第4章では、全国初の公立の音楽ホールと、日本復帰時に沖縄で要望された公立ホールとの比較を通じ、戦後の民主主義のあり方と芸術ジャンルが関係していることが論じられている。

第5章では、沖縄の市町村立ホールに関する本土からのオリエンタリズム的なまなざしについての検討がおこなわれている。

第6章では、沖縄県知事の本土への同化願望、本土からのまなざしによって形成された沖縄イメージ、那覇市民会館の政治的機能について論考が展開されている。

第 7 章では、1990 年代に設置された沖縄の施設を通じ、オリエンタリズム的な沖縄イメージの活用と、それを利用したした沖縄の独自性の強調姿勢が論じられている。

第8章では、国立劇場おきなわの設置を中心に、本土と沖縄の双方におけるメリットの関係とともに、沖縄のまなざしの質の変化が明かにされている。

第9章では、沖縄の公立ホールが本土からのまなざしに対して従順だったわけではなく、実は沖縄の要望を通すために本土からのまなざしを利用していることが指摘された。

第10章では、全体の総括がおこなわれている。

論の組み立て方が二項対立的な構造に陥りがちなこと、論文のキーワードの掘り下げに関してはさらなる改善の余地が考えられるものの、先行研究や関連資料に対する詳細な調査に基づき、これまで本格的な研究がおこなわれてこなかった公立ホールと芸術ジャンルを切り口とした日本本土と沖縄の関係性について新たな視点から論じたものとして、審査委員から高く評価された。

提出された論文に対して、iThenticate により文献との重複の有無を確認したが、専門用語や一般的な事項の定義、また自身の発表論文を除いて既往文献との重複はなく、剽窃、盗用の不正行為はないことを確認した。

以上のことから、本論文は学術的価値や新規性を十分に含んでおり、博士（学術）の学位にふさわしいと判断された。

（試験の結果の要旨）

・令和６年２月７日（水）9：30～11：00 オンラインで公聴会
令和６年２月７日（水）11：00～11：20 オンラインで審査委員会

・予め提出された博士論文を踏まえたプレゼンテーションに関し、これまで本格的な研究がおこなわれてこなかった、公立ホールと芸術ジャンルを切り口とした日本本土と沖縄の関係性について新たな視点から論じたものとして、審査委員から高い評価を得た。
また予備審査時に問題とされた、フーコーの権力論やサイードのオリエンタリズムと論文内で挙げられている個々の事象との有機的な関連性の希薄さ、フーコーの権力論を音楽史研究に用いることによって得られる新たな視点の不明確さ、セルフオリエンタリズムに関する論の掘り下げの不足、資料の活用方法の問題点等についても大幅な改善がなされていることが、プレゼンテーションのみならず質疑応答においても明らかにされ、これについても審査委員から肯定的な評価を得た。質疑にも的確に対応し、査読付き論文の発表により外部による評価も受けている。
その結果、博士学位論文として十分な内容を有しており、合格と判定した。
また学位論文を中心として、これに関連する分野の科目について博士（学術）の学位を得るにふさわしい学力を有すると判定した。
なお、修了に必要な単位は取得済みである

・外国語（英語）に関しては、国際交流基金アジアセンター助成・フェローシッププログラムで採択されたカンボジアのアート NPO の Cambodian Living Arts による Research Residency Project にリサーチャーとして参加し（期間　2019 年 8/22～9/30)、シェムリアップで開催された東南アジアと日本の伝統音楽による音楽祭をカンボジア人研究者と共同で調査。研究発表（2019 年 9 月 25 日）とレポートを英語で作成しており、問題のない運用能力を具えている。。

・研究業績は以下の通りであり、学位取得に必要な数を満たしていると判断された。
1.対外発表論文：「『音楽鑑賞教室』と『アウトリーチ活動』の境界線―理念なき文化活動と政治との関わり―」、丹羽梓、『常盤台人間文化論叢』第 7 巻、1 号、57-81 頁、2021 年
2. 対外発表論文：「地方在住／出身アーティストという文化資源―登録アーティスト制度から見た都道府県文化施設の役割―」、丹羽梓、『常盤台人間文化論叢』第 8 巻、1 号、143-154 頁、2022 年

注　論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。